

比々々々々

027
91
2

029
91
2

44



Handwritten text in cursive script (sōsho) on the left page. The text is arranged in several vertical columns, reading from right to left. The characters are fluid and expressive, typical of cursive calligraphy. The text appears to be a personal note or a short piece of poetry.



わ 拙子 右記 此
① 孫 之 存 之 此
三 持 之 山 之 此
大 女 子 之 此
海 之 記 之 此

の 記 之 此 右 記
り 回 命 之 此
一 大 子 之 此
勢 之 此
孫 之 此 先 之 此

生々々々々々々々々々

七々々々々々々々

月々々々々々

玉々々々々

々々

死々々々々々

善々々々々々

々々々々々々

是々々々々々々々々々

平山居士没てそれと世間の情もなき後のはぢを
むと稱すもさか向つては一冊冊と云ふこと
のそかれおもしろいふ強毅海をたまたま
そのの強き強き書筆にあらざるを御いふ
可ん世之よりとてこゝ此を海をわく世の
人らとて世の淵象と世態をたれゆるは
強毅の陰筆をたると精映ふまゝとて
あはれ筆をたるとは也とてとてとてとて
あはれ

甲辰秋月

平山居士



平山居士

美ひもねもはるき 秋の風
おんの秋もさかやう 九月
それおん何君の秋を初めて 雨泉
英葉は時をたれぬ 孤柳
秋の末はもつと雪のあはれ 九花
秋の末はもつと雪のあはれ 笑地

華光波のそよそよ可なり麦一斗
 え草子あつしとるゆふと
 引ふねたまふほつし馴波流
 ともしーとさ遠空をふ
 懐本尾節一之漢一其牧
 ひくくをひし植原の友を
 ちかひ、つくまをたぬぬく懐も
 作られ友の影印もひし

起 桑 柳 花 池 起 翠 板

今こそなれと序幕れすし
 ともしーとさ遠空をふ
 懐本の影一し
 ちかひ、つくまをたぬぬく懐も
 作られ友の影印もひし

花 池 翠 起 柳 花 池 翠

酒の香気 飲も吐場も其のまじ
 ーと云々 報分 中
 某を相と云く 疎疎くを陣お
 けくく 面白れ 鳴るる 名を
 路の某と 陰を其の 葎布の純
 葎の片おく ーと云く 月
 弁布と 男と 針の 世に 云
 云く ーと云く 林の まじ ーと云く

起 柳 瓦 菜 地 起 柳 花

松葉とれ 火着や 急ぎ 六 傷も 也
 赤ら ーと云く 定ま ーと云く
 出ら ーと云く 者 春を 徒れ 也
 巾 され 聲を 櫛 ーと云く
 花 文 ーと云く 女 人 ーと云く
 日の 入 ーと云く ーと云く

柳 花 起 地 柳 菜

晴るりわたのしーきをわ 村の風 尋常

石生寺の庭の口曰く今雨里に降つ
ともて八尾山月ハ東山を之と違ふ其
れく秋のふつとて無何事とて
ゆへー一をともせき 月影のかい
こゝろなりぬ

惟多く、雨のりつたわ 池とる百 白糸

とあつ 社をいぬ

とあ 社をいぬ ね 収まへゆへー 縮柳

藤とて中ね庭をわすれ窓のかた
五山の介を移 移つたわ
ゆへーかろくろまは ねむらひ

げんをねむらひ ねむらひのね 染地

とあつ ねむらひのねむらひ
とあつ ねむらひのねむらひ

窓のねむらひのねむらひ 九花

ねむらひのねむらひのねむらひ
ねむらひのねむらひのねむらひ

とあつ ねむらひのねむらひ 九花

多岐川乃河原をしのぎて

うねりの 深き川 舟の 舟の舟
たふさぐ 舟の 舟の中
舟の 舟の中

舟の 舟の中

舟の 舟の中

舟の 舟の中

舟の 舟の中

舟の 舟の中

舟の 舟の中

舟の 舟の中

舟の 舟の中

舟の 舟の中

舟の 舟の中

舟の 舟の中

舟の 舟の中

舟の 舟の中

周の海くこの角分まふく

山より入 波を吹く 山のうち

赤坂 杜有

向々九八 潮かきし 兼ふりし

伯遠

ちる木の葉 潮をよる 木の葉

延原

折るも正八 折るるわ 折る市

見外

折るわ 折る木を折る 折る

名山

折る海も折る 折るわ 折る

深角

折る折る 折る折る 折る

折る

折る折る 折る折る 折る

折る

折る折る 折る折る 折る

折る

折る折る 折る折る 折る

折る

折る折る 折る折る 折る

折る

折る折る 折る折る 折る

折る

折る折る 折る折る 折る

折る

折る折る 折る折る 折る

折る

千早はふきき之 晒中これ 林豊
藤くさくすのふきき 中ちりや 仙夏
鶴も酒 庭まふ川を垂るふ 知舟
抱ふりきりも川の光下南 即左
ふきのふき 京やまふ心 一 藤秋

阿ふりては 新 庭 言れ中 榎村
井田 阿ふりては 阿ふりては 藤原

川を物やを 阿ふりては 阿ふりては 阿ふりては 阿ふりては
阿ふりては 阿ふりては 阿ふりては 阿ふりては 阿ふりては
阿ふりては 阿ふりては 阿ふりては 阿ふりては 阿ふりては
阿ふりては 阿ふりては 阿ふりては 阿ふりては 阿ふりては

阿ふりては 阿ふりては 阿ふりては 阿ふりては 阿ふりては
阿ふりては 阿ふりては 阿ふりては 阿ふりては 阿ふりては
阿ふりては 阿ふりては 阿ふりては 阿ふりては 阿ふりては
阿ふりては 阿ふりては 阿ふりては 阿ふりては 阿ふりては

うらやまの梅の葉ももろもろ

涼呼

さきもも家門をうらやま

一季

うらやまももろもろ

一季

江のぬれ梅の葉ももろ

心拙

茶の葉ももろもろ

葉散

うらやまももろもろ

相一

うらやまももろもろ

五打

うらやまももろもろ

西亮

うらやまももろもろ

子煙

うらやまももろもろ

一虫

うらやまももろもろ

此香

うらやまももろもろ

扱白

うらやまももろもろ

坐漁

うらやまももろもろ

梅西

了如是くやのく川ありく際茶 卒他
 依老し陣百字を杖の札 石末
 多端七終心一本を 起 節 柏古
 稿つるや石のほとと 二 交 水作
 十二の月や 一多くはまを川煙 蓮号
 よふ交へてやと成るもとて下ふ石 碧山

證分

携て得たつたれを杖 福玉付 両石
 一しんくはくく月夜を末を 一信
 卯やをひくくはるの月ん小 李燈
 空をわくを打あや山の取 思之

尾作

才たはくくはくくを杖や教信水 澄海
 張我れ空をわくくを杖の七也 柳介

ん作

宵半や 枕のゆくまじくまじく
 可松
 山
 夕や暮る 雨声、芝ふ新酒小
 可松
 山
 夕や暮る 酒のゆくけや雪の月
 可松
 山
 夕や暮る 行り暮る 雪の月
 可松
 山

谷より雪を 枯くひらき 屋を 雪
 可松
 山
 海を 雪く 山を 入る 雪の 月
 可松
 山

高きを 雪のゆくまじくまじく
 映門
 可松
 山

夕や暮る 雨のゆくまじくまじく
 可松
 山
 夕や暮る 雨のゆくまじくまじく
 可松
 山

夕や暮る 雨のゆくまじくまじく
 可松
 山
 夕や暮る 雨のゆくまじくまじく
 可松
 山

新うそや 華のうそふ 華のうそふ 新 延平
 院やまぐさのうそく 院 うそ 未
 うり 杜のうそく 院 うそ 生化
 花のうそく うそ 院 うそ 相芽
 うそく うそ 院 うそ 風骨
 柳のうそく うそ 院 うそ 九江

新うそく うそ 院 うそ 九江

花のうそく うそ 院 うそ 九江

うそく うそ 院 うそ 九江

院 うそ 九江

月の位はく種の中にもとくれ
 落却の因を又いふれあうる
 りやけしと身を定計之除却
 多由の爲る事や雲の中
 ニ三度了何るれ道に愛せられ
 菜のふや 蘇とよまきむのけけ
 引く川のさるるやりく子
 情くく愛するや夜のや
 馬節 唐風 席作 紅差 垂外 桃矢 耕春 月控

御系十ナリもいふ姉妹
 心けりしをわづらひしは根引
 足程のえ抱しきや 播磨ま
 さるけく愛するや 極楽くれ
 情をけし月ひきてに啼き出り
 夕月也 おもわれらるる 東下す
 かつりきさの白れや 播磨ま
 紅差 大津 宇布 慈差

守てれとこるもわ 不くはる守 井石
 作とろと 雲を物より 啼え 露 眉山
 くらひよめ 所くう 命しきれ 雲 不白
 雲をまきし 悔く 川の末 葉 上翠
 くら水も ありたり なるの 姓 在外
 ニニ云え 所く 柳 口く 在り 丸倉
 雲の 雲く 所は 階の 外ら 相推
 印の 雲 砂 一途く 五れ 終夜 虚白

雲川く 物くつ 雲の 小 供え 丸 雲角
 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 不 確
 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 可 明
 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 共 明
 甲辰の 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く
 一ととわ 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く
 雲 雲

年一歳一人不存を恨まの六秋を
春之末のを採しけしを春の花は
西の空をくさしく

夜月波初速をゆく波より

九起

即ち此の如く車あなきおきか

路他

即ち此の如くえくひさしく

句集

何の如きく沙るこる之如

孤柳

此編のふしやうの唐を指す

わきとくさしるるの村の九

九花



